



Vol. 33

当事者意識を持って考える

小説家 真山 仁
MAYAMA Jin



© Yuki Asada

PROFILE

1962年大阪府出身。同志社大学法学部卒業後、中部読売新聞(現・読売新聞中部支社)に入社。退職後フリーライターを経て、2004年『ハゲタカ』でデビュー。『虚像の砦』『ペイジン』などヒット作多数。2011年、ニジエールの青年海外協力隊への取材内容が盛り込まれた『コラブティオ』を出版。「なんとかしなきゃ! プロジェクト」著名人メンバー。

私が小説家として、初めて本格的に原子力発電をテーマにしたのは『ペイジン』という作品でした。中国を舞台に書くことは決まっていたのですが、日本企業の進出といったテーマはほかでも書き尽くされている。今回の作品ではどこに注視すべきかを考えて、ここはやはり「エネルギー」ではないかと。爆発的な人口増加を受けて、中国がどのようにエネルギーを調達していくのか。もちろん、彼ら自身ですべて賄うことはできませんから、そこで日本とのかかわりを描くことができないかと思いました。

執筆に当たり、日本国内の原発事業者の取材を重ね、現場で汗を流す人たちからも話を聞きました。そこで強く感じたのが、この分野は世間では誤解されている部分が多いのではないかということ。原発は非常にセンシティブなトピックです。ノンフィクションだと書けないこともありますが、小説というフィルターをかけると、より深い本質的な部分を描くことができる。小説家が社

会問題を取り扱う意義は、そこにあると考えています。

私が物語を組み立てる時に焦点を当てるのは、世の中の“光”ではなく“影”的部分です。そうすることで、結果的に光が何かも見えます。ですから『ペイジン』でも、あえて原発を柱に据えました。もし太陽光発電を取り扱ったとしても、「夢の太陽光国家をつくればビジネスチャンスも広がる」といった内容にはせず、「とんでもないことが起こる」と書いたと思います。ありえないと言われていることを起こせるのが小説。そうすることで、世の中の人々に警鐘を鳴らしたいのです。

すべてが“当たり前”になってしまっている社会の中で、危機感を訴えるのは大変難しいことです。『コラブティオ』の取材でウランの産出国である西アフリカのニジェールに行った時、夜になると町は真っ暗で、暗闇の中、道路脇を人々が平気で歩いていました。東京で暮らしていたらまったく気にならないことが、そこでは起こっているのだ

ということを実感しました。東日本大震災の後、東京の街が暗くなったといってもケタ違います。

これだけエネルギーに依存しているにもかかわらず、それがどこで、どのように生み出されているかを知っている人がどれほどいるでしょうか。私たちには今、これまで無関心だったツケが回ってきてているのではないでしょうか。

福島の事故が起きなくても、日本はエネルギー問題について考えるべき時に行っていたと思います。私たちの生活は、電気なくして成り立ちません。この問題にどう向き合っていくべきか。地球の未来を変える力を発揮できるような気付きを、小説を通じて与えていかなければと思っています。

「なんとかしなきゃ! プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ!



独立行政法人 国際協力機構

